Case 02

広島県
大崎上島

故郷で次世代を担う高校生の活動を支援

広島県立大崎海星高等学校
魅力化コーディネーター
円光 歩

■島で教育に携わる原動力となった小学校の思い出

私は今、「この島で学んでよかった」と胸を張って語ることができます。それは、故郷・大崎上島の魅力あふれる学校や地域の大人たちのおかげです。だからこそ、次の世代を担う子どもたちにとっても「この島で生まれ育ってよかった、学んでよかった！」と感じられる島であり続けてほしい、自分がその一助でありたいと強く思っています。高校を卒業する時点で大崎上島で子どもたちの学びに関わる仕事に就きたいと夢を持ったことが、私のUターンのきっかけです。

大崎上島町は、芸予諸島に属し、瀬戸内海のほぼ中央に位置する大崎上島を中心とした、複数の島々からなる自治体です。広島本土からフェリーで約三〇分、東京からも飛行機と船を乗り継いで最短二時間三〇分と、離島ながらアクセスは比較的良好です。瀬戸内海特有の温暖少雨な気候に恵まれ、柑橘類の栽培が盛んであるとともに、古くから造船業で発展してきました。しかしながら、現在の人口は約六五〇〇人と、過疎化・高齢化が進行しており、さまざまな課題を抱えているのも現実です。

私は、小学校、中学校、高校と地元の学校に通い、「すごく学校が楽しかった」という思い出にあふれています。また幸運にも、恩師と呼べる素晴らしい先生たちにも巡り合うことができました。特に、小学校時代に出会った先生の影響で、子どもに関わる仕事がしたいと思うようになったことは間違いありません。

現在の私につながる原体験の一つは、小学校時代に「やりたい」と言葉にすれば応援してもらえる環境があったことです。授業で子どもたちが乗れる船をみんなで作ってプールに浮かべたり、体育館や先生の家でお泊まり会

をしたり、「やりたい」と口にした時に、否定されたり「駄目だ」と言われるのではなく、「どうやったらできるか」を先生が一緒に考えてくれました。そして、それを実現した体験が、その後、何をするにしても自分の原点になっています。言葉にして動けば、何かができるんだと実感した経験でした。

その他にも、小学生の頃からスポーツクラブでサッカーや陸上に取り組むなかで、たくさんの方に応援されることで実現できたことがありました。島という環境では、人数が少なく大変なこともありますが、みんなで協力して取り組み、助け合って工夫することで可能性は広がります。たくさんの試合に参加させてもらったこと、初めての練習試合を開いてもらえたこと、一生懸命やることでコーチや保護者など大人の方々も応援してくれることなど多くのことを知りました。

島の子どもたちに学びの楽しさを伝えたいとUターンを決意。

その「やればできる」「動けば何かが変わる」という二つの価値観を育んでくれたのは、島の学校であり、大人たちの存在でした。この経験があったからこそ、改めて次は自分が島の子どもたちに関わる仕事をしたいと思い、大学院を修了する時、Uターンすることを決めました。

■閉校の危機から始まった高校魅力化

島にUターンした当初は福祉系の仕事をしていましたが、平成二六年、広島県立大崎海星高等学校（以下、大崎海星高校）が生徒数の減少により統廃合の危機を迎えたことをきっかけに、同校に関わることになりました。

その危機は、広島県教育委員会が同年二月に策定・発表した「今後の県立高等学校の在り方に係る基本計画」によります。同計画において、一学年一学級規模の生徒数が少ない学校は、各校が学校関係者、所在する市町および市町教育委員会などで構成する「学校活性化地域協議会（以下、協議会）」を設置し、協議会において他校に見られない取り組みの強化などによる活性化策を検討すること、とされました。

そして、活性化策実施後の平成二九年から二年連続し

て全校生徒数が八〇人未満となった場合、協議会の意見を聞いたうえで地理的条件を考慮し、「近隣の県立高校のキャンパス校へ改組」「中高学園構想への移行」「統廃合（市町立学校としての存続を含む）」のいずれかの措置がとられることとなりました。

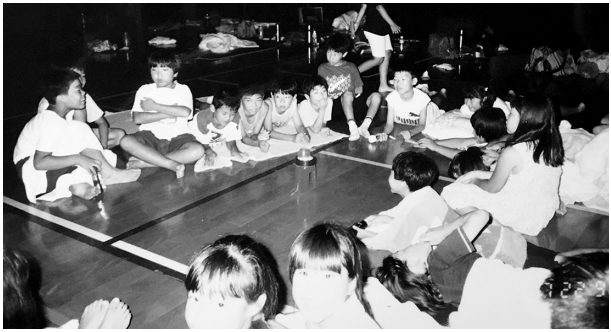
大崎海星高校は、平成二六年度時点で、既に生徒数が六七人まで落ち込んでおり、「このままでは学校がなくなる」「学校がなくなれば、島は衰退する」という思いが地域の中にありました。島に唯一の県立高校（当時）がなくなると、子どもたちは島外の高校に進学せざるを得ず、島で学ぶ選択肢がなくなるだけではなく、子育て世代にとっても大きな負担になることが想定されます。

そこで、その時の校長をはじめ学校関係者や、町長をはじめ行政の方たちが「学校と地域が一緒になって魅力ある学校にしていこう」と動き出したことで、「大崎海星高校魅力化プロジェクト」が始まりました。何をすれば良いのか、何から手をつければ良いのか、誰もが分からないなかでのスタートです。

島で子どもに関わる仕事がしたいと思っていた私にとって、母校が廃校になるかもしれないという現実は見過ごせるものではありませんでした。その後、私は大崎海星高校魅力化プロジェクトに参画しますが、それは必然のことでした。

大崎海星高校魅力化プロジェクトは、三つの柱からできています。地域をフィールドに学ぶ「大崎上島学」、生徒の学習環境を整える公営塾「神峰（かんのみね）学舎」、全国から生徒を募集する「教育寮コンパス」です。これらを柱にしながら、地域と高校が一緒になって地域資源を生かし、魅力ある学校づくりに向けた取り組みを進めていきました。

地域と学校が一緒になって取り組むからこそ、学校と地域、先生と地域、全国の中学生と学校、生徒と地域、そして時には地域の人同士をつなぐ人材が必要となります。私は、コーディネーターとして、このプロジェクトに関わるようになりました。



小学生時代に筆者が経験した体育館でのお泊まり会。

■地域と協働する生徒活動

大崎海星高校では、総合的な探究の時間「大崎上島学」に力を入れています。コンセプトは、「大崎上島で学び、育ち、グローカルに生きていく人材を育成する」で、島全体が学びのフィールドであり、瀬戸内の雄大な自然、人々の暮らし、働く大人の知恵などを題材に学んでいきます。

この特色ある取り組みを支えているのは、授業や生徒の活動に協力してくれる地域の方々です。年間で六〇名以上の人たちが「大崎上島学」を中心に生徒たちと関わっています。ゲスト講師として話をしてくださる方、授業でインタビューに協力してくれる方、仕事の魅力を語りキャリア教育を支える方、生徒の探究活動やプロジェクト活動に伴走してくれる方など、その関わり方は多岐にわたります。

このように地域へ飛び出して活動する生徒が増えることで、地域にとっても良い影響が広がっていると感じています。以下、具体的な事例をいくつか紹介します。

海星保育園の開催

島の未就学児が、保育施設以外にも安心して遊べる場所をつくれないか。大崎上島学でのそんな思いを発端に、将来保育士になりたいという二人の生徒が動き出しました。高校を地域に開き、子どもたちがゆったり遊べる場や新しい体験を届けようという挑戦です。

これまでも保育園の手伝いをする機会はありましたが、自分たちが主催し、企画から運営までを担うのは初めての経験です。学校の使用許可を取り、自分たちで遊びを考え、保育士の方に相談しながら準備を進めていきました。当日は、それまで高校に足を踏み入れたことのなかった小さな子どもを持つ子育て世代も多く参加しました。絵本の読み聞かせや工作などを通して、生徒たちは子どもたちを楽しませる時間を自らの手でつくり上げることができました。

初めてのチャレンジでしたが、自分たちで企画し、形にした経験は、生徒らのその後の進路への大きな後押しとなりました。二人は高校卒業後、それぞれが資格を取得し、今では地元で保育士として働く心強い地域の一員へと成長しています。

「大串おでん」の継承

大崎上島の大串海水浴場の海の家で、長年愛されてきた甘い味噌味の「大串おでん」。地域の多くの人に親し

まれていましたが、スタッフの高齢化などを理由に、長い歴史に一度幕を下ろしていました。その地域の思い出の味を復活させたいと、一人の高校生が立ち上がりました。

「地域の人たちに愛されてきたこの味を、今の子どもたちにも届けたい」という強い思いを持ったその生徒は、かつてのスタッフに作り方を教わりながら、その味を学び、地域イベントなどに出店する形での継承を模索していきました。

思い出の味を受け継ぐことは、単に食文化を残すだけではありません。味を通して地域を思い出し、地域との結びつきを未来へつないでいくことでもあります。高校生の活動が、地域に新しい流れを生み出しました。

釣り好きを増やす体験会の実施

「どうしたら島の海の魅力を自慢できる人が増えるのか？」そんな問いを一人の生徒が抱きました。考えた仮説は、「釣りイベントを継続して開催し、子どもたちが海の楽しさを体験すれば、やがて島の海を誇りに思う人が増えるのではないか」というものでした。島の海が好きで、釣りの魅力に夢中になっていたその生徒にとって、その素晴らしさを次の世代に伝えることは自然な挑戦だったと思います。

そうして始まったのが、高校二年生時に取り組んだ、小学生向けの釣り体験会です。企画にあたっては、高校生だけで進めるのではなく、大崎内浦漁業協同組合にも相談しました。その結果、「海好きな子どもたちを増やす」という思いに共感した漁協の協力も得られることになりました。

さらに、「一回限りではなく、海を好きな子を増やすなら継続した方が良い」という地域からの助言もありました。その言葉を受け、生徒は高校三年生になっても活動を継続。小学生向けの釣り体験会は重ねて実施されました。

参加した小学生や保護者の満足度は毎回高く、島の海

地域の人に親しまれてきた「大串おでん」を復活。

と釣りの魅力は確実に届いていきました。生徒自身も、「一度釣りが大好きになれば、楽しかった記憶が薄れることはあっても、忘れることはない」と語っていました。その言葉通り、この活動は次の世代へも受け継がれていきます。ともに活動していた後輩がその思いに共感し、翌年もまた、島の海と魚の魅力を伝える企画として継続していくことになりました。一人の高校生の「好き」から始まった挑戦は、地域の海に対する誇りを育てる流れへと広がっています。

■誰しもが参画できる「学びの島」へ

これまで私は、大崎海星高校魅力化プロジェクトにてコーディネーターとして学校と地域をつなぎ、子どもたちの学びの機会を充実させる仕事に取り組んできました。学校と地域がつながることで学びが深まり、地域に新しい可能性が広がる。その面白さこそが、私にとって何よりのやりがいです。

だからこそ、この素晴らしい島のポテンシャルをこれまで以上に生かし、「学びの場」づくりをさらに進めていきたいと考えています。大崎上島町は、これまでも同プロジェクトをはじめ、さまざまな教育の取り組みを行なってきています。今後は子どもたちだけでなく、「学びの島」として、誰もが生涯学び続けることができる島。豊かな学びの環境があふれている島。そんな未来に向かうための一助になりたいと、私は強く思っています。

海好きな子どもを増やすために小学生向けの釣り体験会を企画。

※大崎海星高校魅力化プロジェクトおよび大崎上島学については、本誌268号連載「島の学校から」、280号特集もご参照ください。

円光 歩（えんこう あゆむ）
昭和六三年生まれ、大崎上島出身。大崎海星高校を卒業後、地域教育を学ぶために鳥取大学地域学部地域教育学科へ進学。同大学院を修了後に、Uターンして二年間地域福祉に従事。平成二六年より大崎海星高校魅力化プロジェクトで「地域」と「学校」をつなぐ魅力化コーディネーターとして活動。（一社）まなびのみなとメンバー。